



CONTENTS

- 巻頭言
「他人事ではない、アジアの環境汚染」
(福井誠) …P.1
- 現地活動報告
フィリピン (田原寿子) …P.2
- 支援で育つ子どもたち …P.3
- 日本事務局から
活動報告・お知らせ …P.4
- ◇ TOPIC ◇ 参加者募集
2010年3月フィリピン訪問ツアー

他人事ではない、アジアの環境汚染

この夏、地元の多摩川で水浴びする子どもたちを見た。こんな川で大丈夫だろうか、と思うところもあったのだが、見れば随分と綺麗な川ではないか。

最近では、アユが戻り、サケの逆上も確認されているというが、その昔、多摩川の水質汚染は、非常に深刻であった。もともと子どもの楽しい遊泳の場とされた多摩川は、高度経済成長と共に、激しく汚染され、下流に真っ黒な濁流をつくる状態であったという。当然、東京湾の干潟でも異臭が漂い、潮干狩りをする人の姿も消え、やがて誰も再生の希望を抱く者もなかったであろう、河口は次々と埋め立てられてしまうのである。こうして農業や工業排水の垂れ流しによって、魚類が大量死するようになり、1970年、骨の成長期に軟骨に異常が出ると言われる「カシンペック病」の騒ぎまで起こり、遊泳は禁止され、まさに「死の川」とみなされるようになった。そんな時代の先入観があるのだろう。

しかし、あれから多摩川では、工場の移転と、大規模な治水工事や下水道が整備されたことによって、完全に水質を回復させたとは言えないまでも、以前とは比較にならないほどに綺麗になり、

夏の暑い日には、少し足を入れてみたいという気にさせてくれる川になったのである。

戦後復興の流れの中であって、大人たちは、工業や経済の発展のために川を犠牲にしなくてはならなかった。しかしそれは、子どもたちが魚を獲ったり、泳いだりする水遊びの場が、長く取り戻しえなかったことにおいても、大きな損失であったことに間違いはない。そう考えてみると、今や、フィリピンのセブ島もまた、同じような環境破壊に直面していることを、意識せねばならないように思う。

セブと言えば、リゾート地、南国の白砂とブルーのビーチを思い浮かべるところであるが、そのような砂浜は人工的に作られ調整されたもので、そこから地続きで、それほど遠くもない海岸は、工場用水や生活用水で汚れきって、異臭を放っている。かつて日本が経済発展のために、自然を痛めつけ、犠牲にしたのと同じような状況がある。スラムの子どもたちは、そのような水際で遊ぶのであるから不衛生な環境のもと、病気になりやすく、命すら落とすことがあると聞く。